平成２９年度病院医学教育研究助成成果報告書

報告年月日	平成３０年　４月　６日
研究・研修課題名	箱庭療法学会第31回大会・ワークショップ
研究・研修組織名（所属）	精神科神経科
研究・研修責任者名（所属）	高野　由美子
共同研究・研修実施者名（所属）	高野　由美子　佐々布　亜希子　三成　綾

目的及び方法、成果の内容

①目　　的

箱庭療法学会は1987年7月に我が国唯一の箱庭療法学に関する学術団体として設立された学会である。
箱庭療法は1929年にイギリスのマーガレット・ローエンフェルドによって考案され、その後スイスのドーラ・M・カルフによってユング心理学を基盤として心理療法に用いられる形に確立され、我が国へは河合隼雄により1965年に導入された。箱庭療法とは砂の入った箱の中に様々な玩具を自由に配置することによって、言語化できない心の深層の動きを視覚可能な形で表現することを目的とした心理療法の一つであり、現在では精神科、小児科などの医療現場、学校教育、法務臨床、など様々な領域においての心理臨床活動に広く用いられている非常に有用な方法である。
また近年では、そのような箱庭を使用した心理療法だけでなく、夢や描画などの様々なイメージを扱う事例についても多くの事例検討や研究報告が行われている。
このように箱庭療法は、外からは見ることができないが誰でもが心の中に抱いている「イメージ」に深く関与してくことを目的とするものであり研究が進められている。箱庭療法学会では「イメージ」を見据えた心理療法を実現するための支援、交流の場として箱庭療法学会や、各地方で開催される箱庭研修会など、様々な研修、研究活動を行っている。
我々、臨床心理士は有効な心理療法である箱庭療法を日々の臨床に取り入れているが、目に見えない心の動きやその中にある「イメージ」を的確に捉え治療に生かしていくことは簡単なことではなく、慎重に取り組まなければならない。そのため、箱庭や心の中の「イメージ」について、またユング心理学について継続的に学んで行くことが必須となる。
本研修会に参加することにより、箱庭療法や描画法など「イメージ」を用いた心理療法について、様々な最新の研究や事例発表を見聞し、そのようにして身につけた様々な知識をより効果的に実際の臨床場面に取り入れ、実践し、より良い治療を目指していくことが目的である。

②方　　法

平成29年10月7日･8日に開催された箱庭療法学会第31回大会・ワークショップに参加し、箱庭療法やユング心理学、「イメージ」を取り入れた心理療法の現在について、理解を深めた。
10月7日午前に行われたワークショップB『箱庭表現と家族の再生』（講師：岩宮恵子先生：島根大学）では子どもに対する継続的な心理療法での関わりにより子どもが変化することで親もまた変化していくという過程が発表され、子どもの変容が家族に与える影響の強さが明らかとなったケースを聞くことができた。ワークショップF『内なる宗教性との出会い』（講師：川戸圓先生：川戸分析プラクシス）では、カルト宗教に入信していた患者が自らの気づきによりカルト宗教から脱却するまでの心理過程をまとめた発表を聞くことができた。
午後は公開シンポジュウム『こころの新時代と心理療法』に参加した。基調講演は社会学者の大澤正幸氏による講演が行われた。講演後はシンポジストに河合俊雄先生（京都大学こころの未来研究センター）が登壇され、大澤正幸氏の哲学的な視点と河合先生の臨床心理学的視点から現代のこころについて興味深い議論を聞くことができた。
10月8日は午前、午後ともに多くの研究発表が行われた。参加した発表では、発達障害などの障害を抱えた患者への心理療法過程や、心身症患者への心理療法、緩和ケア病棟における心理療法など、多くの事例に触れることができた。

心理療法は非常に個人的な内容に関わることであるため、その中で何か起きているかということを公にすることは難しい。このように一度に多くの事例に触れることができる機会は大変貴重な経験である。本学会に参加することで最近の心理療法の傾向、研究などについて多くの知識を得ることができた。

③成　　果

・言葉で語ることの窮屈さを抱く患者が、箱庭を用いて葛藤や話したいことを表現しようとする事例や、白血病患者の発症直後から永眠直前までの心理療法を報告するワークショップに参加した。生活歴の中で自分自身のことを人に話す機会が少なかった患者が持つ心理療法の場へのニーズについて認識するとともに、現実的な悩みを語る患者との心理療法の中に、時折出現するイメージによる表現の意味や重みについて深く考察し、それを聴く医療者側の姿勢について考えさせられた。

・幼少期から周囲や本人が何らかの困難さを感じつつも適切な支援につながるきっかけがなく、成人となった方が多く存在する。うまく環境に適応できず、大人になってから二次障害を起こしてしまうケースも多い。今回参加した、発達障害の傾向を持つ 30 代後半の男性の事例では、身体のベース（自己感）が確立されていない患者に対して、治療者が丁寧に患者の言葉を照らし返すことが重要となっていた。治療者が患者の言葉を丁寧に拾い、返すことで患者の自己理解が深まり、現実適応が可能となっていった。成人期の面接ということで経過は長いが、成人期でも変化の可能性がありうることを学んだ。

・母親との関係に悩む青年期女性が、アルバイト先、会社など自分の居場所を見つけていく過程で母親との分離が可能となった事例発表に参加した。アトピーという症状とアグレッションの強さの関連が指摘されていた。当院でも、リエゾン等で他科の患者の心理検査依頼がある。身体疾患における心理的背景の理解を深めていくことの重要性を知った。

・心理療法では心の中のイメージの一つとして「夢」を扱うことがよくある。今回のワークショップＦでは患者の夢を心理療法の中で取り上げ、話題にしてイメージを広げていくことで患者の気づきを促していく過程が詳細に発表されていた。事例の中心はカルト宗教からの脱却であったが、心理療法の中で「宗教」をどのように扱うかは非常に難しいところである。

発表のタイトルには「宗教性」という言葉が用いられているが「宗教」と「宗教性」とは別のものである。人は思いがけない困難に見舞われ、自分の力ではどうにもならないと思った時、何か日常を超えた超越的な存在を意識し始めることがある。「宗教性」とはこのような、人を超えた存在としての超越的な存在について考えたり、求めたりする気持ちのことである。「宗教性」は特定の「宗教」とは関係なく、個人の内面（深層心理）にある心の動きである。この心の中の動きが外の動きと結び付いた時、特定の「宗教」への入信、または何らかの形での「宗教」との関わり、という行動として外面に表れてくる。本ワークショップでは、そのような超越的な存在を求めてカルト宗教へ入信したものの、現実的な生活はむしろ困難になってしまった患者が、自らの心の中にある「宗教性」に気づくことにより、外的な「宗教」は必要ではなくなり脱却へと至った過程が示された。

我々が日常の臨床で患者として出会う人々は、このワークショップの発表の患者のように何らかの苦しみや困難さを抱えている人たちである。その苦しみは心理療法を実施することによってすぐ解決するようなこともあれば、簡単に解決には至らない苦しみであることも多い。そのような場面で、治療者として継続的にきちんと患者と向き合うためには、目には見えない心の深層の部分のことまで視野に入れておかなければならない。そのような心の深層に近づくための手段の一つが「夢」を扱うことである。このワークショップに参加することで、どのように「夢」を面接の中で生かしていくのか、どのようにしてイメージを広げていくのか、どのようにして患者自身が自分自身の心の動きに気付いて行くことができるのか、ということについて非常に大きな示唆を得ることができた。